第八回「いのちの授業」大賞　受賞一覧

【大賞（知事賞）】　作品名　「ちがいのちがい」をべんきょうして

筆者　萱（かや）　世理奈（せりな）　愛川町立中津第二小学校　二年

授業実践者　鈴木（すずき）　久美子（くみこ）　愛川町立中津第二小学校　教諭

【教育委員会賞】　作品名　ぼくの弟

筆者　西ケ谷（にしがや）　銀星（ぎんせい）　寒川町立旭小学校　三年

授業実践者　西ケ谷（にしがや）　達則（たつのり）　保護者

【神奈川新聞社賞】　作品名　助けの手を差し伸べる

筆者　郷原（ごうはら）　動（ゆるぎ）　横須賀市立久里浜中学校　三年

授業実践者　長島（ながしま）　萌美（めぐみ）　横須賀市立久里浜中学校　教諭

【ｔｖｋ賞】　作品名　命とは

筆者　田中（たなか）　美優（みゆう）　小田原市立鴨宮中学校　二年

授業実践者　山本（やまもと）　圭悟（けいご）　小田原市立鴨宮中学校　教諭

【神奈川県ＰＴＡ協議会会長賞】　作品名　いのちの授業をうけて

筆者　髙村（たかむら）　心結（みゆ）　南足柄市立岡本中学校　一年

授業実践者　八柳（やつやなぎ）　重夫（しげお）　神奈川被害者支援センター

佐々木（ささき）　みどり　神奈川被害者支援センター

【ともに生きる社会かながわ憲章賞】作品名　「思いやり社会」

筆者　吉田　美清（よしだ　みさや）　川崎市立井田小学校　六年

授業実践者　増子　美穂（ましこ　みほ）　川崎市立井田小学校　教諭

7

【優秀賞】作品名　「いのち」は廻る

筆者　細野（ほその）　めいか　神奈川県立中央農業高等学校　二年

授業実践者　登（のぼり）　健太（けんた）　神奈川県立中央農業高等学校　総括教諭

8

【優秀賞】作品名　みいたんのこと

筆者　小林（こばやし）　柚香（ゆずか）　寒川町立旭小学校　二年

授業実践者　小林（こばやし）　誠（まこと）　保護者

9

【優秀賞】作品名　「本当に伝えたいこと」

筆者　野田（のだ）　栞名（かんな）　神奈川県立港北高等学校　二年

授業実践者　山本（やまもと）　良子（よしこ）　神奈川県立港北高等学校　教諭

10

【優秀賞】作品名　ふり向かずに前へ　池江璃花子19歳

筆者　細野（ほその）　ひなの　伊勢原市立山王中学校　三年

授業実践者　高田（たかだ）　直紀（なおき）　伊勢原市立山王中学校　教諭

11

大賞（知事賞）

「ちがいのちがい」をべんきょうして

愛川町立中津第二小学校
二年　萱　世理奈

わたしは今日、学かつの時間に「ちがいのちがい」をべんきょうして、すきなものをすきでいいんだと思いました。

先生がテレビで、「あってもよいちがい」と、「あってはいけないちがい」のクイズをうつしました。友だちと話しあって、すきなものやとくいなことのちがいは、「あってもよいちがい」ということになりました。お花がすきな男の子も、プラモデルがすきな女の子も、それでいいのです。

でも、男だからおもいものをもつ、女だからりょうりをする、ときめるのは、「あってはいけないちがい」です。おもいものは力もちの人がもってあげればいいし、りょうりはとくいな人がやればいいんだね、ということが分かりました。

さいごに、いろいろなしごとをする人のしゃしんを見ました。わたしは、女のじえいかんがかっこいいなと思いました。男の人たちの中でがんばっていてすごいし、日本のあんぜんのためにはたらきたいという気もちも、すてきです。

わたしは前からずっと、ドーナツやさんになりたいと思っています。大すきなドーナツで、おきゃくさんにえがおになってもらいたいです。男だから、女だからとちがいをつけずに、一人一人のすきなものを「いいね」と言ってあげることが大切なんだと思いました。

教育委員会賞

ぼくの弟

寒川町立旭小学校
三年　西ヶ谷　銀星

ある日、しんしつでお母さんがないていました。ぼくは、どうしてないているのかわかりませんでした。お父さんは、お母さんのそばにいて心配そうな顔をしていました。お父さんは家族を全員しんしつに集めました。お父さんは、

「お母さんだけに悲しい思いをさせないで、みんなでわかちあおう。」

と話し始めました。お母さんのおなかの中に赤ちゃんが来てくれたけど、すぐに死んでしまったというお話でした。ぼくはお母さんのおなかの中に赤ちゃんが来ていたことは、知らなかったからびっくりしました。みんなさみしい気持ちになってなきだしました。赤ちゃんは、お母さんのおなかに来ても、みんながぶじに生まれてこれるわけじゃないということを知りました。

それからしばらくして、また赤ちゃんがお母さんのおなかに来てくれました。ぼくは、うれしかったけどまた死んでしまうかもしれないと思って少し心配でした。でも、赤ちゃんは、男なのか女なのかが気になりました。

お母さんが病院に行く度に赤ちゃんがどんどん成長しているえいぞうを見せてくれました。だけど、お母さんはずっと血あつが高くて元気がありませんでした。だからぼくは、なるべくおてつだいや弟のめんどうを見てあげようと思いました。お母さんのおなかをさわると少し動いたりしてふしぎなかんじがしました。ある日の夕方、お母さんが夕はんを作っていたらきゅうに具合が悪くなって入院することになってしまいました。ぼくは、さみしくなってとても心配しました。次の日のお昼には、元気になって帰って来て、赤ちゃんもぶじだったから安心しました。

みんなで女の子の名前と男の子の名前を考えました。姉は、ぜったいに女の子がいいと言っていました。ぼくたちきょうだいは全員しぜんをイメージした漢字が使われているから、赤ちゃんの名前も同じようにつけることにしました。もうすぐ生まれそうになったとき、たぶん男の子だろうということがわかっておばあちゃんが神社に行って名前のこうほを見てもらって『太陽』に決定しました。

お母さんは、しゅじゅつをしておなかを切って赤ちゃんを生むことが決まっていました。しゅじゅつの前の日、一週間分の荷物を持って夕方から入院しました。ぼくは、太陽が生まれてくるのが楽しみだったし、ぶじに生まれてほしいからえ顔でお母さんをぎゅっとだきしめて、

「いってらっしゃい。」

と言いました。ぼくたち小学生は、学校があるからそばにいてあ

げられないけど、ようち園の弟はお休みをしてお父さんといっしょにつきそうことになりました。

学校が終わって、病院に行ってまずお母さんがいる部屋に行きました。お母さんは、たくさんのきかいにつながれていて、とても苦しそうにねていました。

「おなかがいたい。」となんども小さい声で言っていました。大きなガラスの向こうがわに、太陽がいました。ぐっすりねていたけど、元気そうでした。ぼくは、ほっとして帰りの車の中でないてしまいました。

ぼくたちは、ほとんど毎日おみまいに行きました。さいしょは、おそるおそる太陽をだっこしました。小さくて軽くてとてもかわいかったです。お父さんもミルクをあげたりしていました。

予定通り、お母さんと太陽は一週間で退院しました。お母さんが入院してからずっと、おばあちゃんがおてつだいに来てくれていました。お母さんは、夜中もおっぱいをあげなくちゃいけなくて、ねぶそくだから大へんだと思いました。

いま、太陽は一才三ケ月になって、歩くし、よく食べるし、いっしょに遊べるようになりました。太陽の体は、おもちのようにもちもちでだっこするととても気もちいいから、ぼくは、いつもだっこをしています。太陽がわらうとぼくもえ顔になってしまいます。太陽が生まれてきてくれて、本当によかったと思います。

神奈川新聞社賞

助けの手を差し伸べる

横須賀市立久里浜中学校
三年　郷原　動

僕は小学校の頃、初めて外国に貧しい国があることを知った。そして、中学三年生になり、ガーナという国が貧しいと言われていることを学習した。ガーナは僕の大好きなチョコレートの素になるカカオ豆の生産が盛んな国である。そのカカオ豆がとても安い値段で売られてしまっていることで、ガーナのカカオ農園の人々は生活をすることがとても苦しいそうだ。このことを耳にし僕は、今の自分の生活と比較してみた。

今の僕は、当たり前のように寝て、起きて、食べて、当たり前のように学校に行き、学習指導を受けている。これに対し、ガーナの子供たちは、学校に行くことすら珍しく、食べることもままならない状態らしい。

果たしてこれは、ガーナの子供たちと僕たち、平等とは言えるだろうか。僕は瞬時に「いいえ」と答えることができる。なぜなら、ガーナの子供たちは、僕の当たり前が全く当たり前ではないからである。この違いに対し、何かガーナの子供たちを救える取り組みはないのか、僕は調べた。

すると、「ユニセフ」や「フェアトレード」などがあった。この二つの中でも特に「フェアトレード」に興味がある。

「フェアトレード」とは英語で「Fair trade」と書き「公正な貿易」という意味だ。「フェアトレード」とは一般貿易と何が違うのだろう。

「フェアトレード」は生産者から消費者までの余分な流通経路がなく、その分、生産者への利益が高いそうだ。また、一般貿易と違い商品としてお店に並んだ時の値段が少し高いのが特徴だ。そのため、生産者へ送られる給料が多少でも高くできるらしい。

自分でも「フェアトレード」の商品を買えないか、調べてみた。すると、コンビニエンスストアなどでフェアトレード商品が自分の小遣いでも買えることがわかった。

このように、中学生でも充分社会貢献ができる。そして、沢山の人がこの商品を購入すればその分、生産者へ多くのお金がいく。こうすることにより、ガーナの子供たちも当たり前のように寝て、起きて、食べて、学校に行き勉強できる。

今現在のガーナの人々は、短命でこの世を去る人がまだいる。しかし、このような活動への支援が増すことにより、その命は助かるかもしれない。僕はこの「フェアトレード」によって一人でも多くの人の命を助け、幸せにしたいと思う。

†ｖｋ賞

命とは

小田原市立鴨宮中学校
二年　田中　美優

私は最初、人は死んでしまったらもうそれで終わりだと思っていた。しかし、この新聞を読み、人の死にはそれぞれの考え方があることを知った。

六歳にも満たない女の子が脳死状態になり、もう目を覚ますことはないと分かったら両親はとても辛いと思う。そして、目を覚ますことはないと分かっても、少しでもＡちゃんのそばに長く居たいと誰もが思うだろう。私だったら、いくら他の人が幸せになると分かっていても、家族の臓器を提供することへはふみ出せないと思う。だが、この脳死した状態が私だったら、迷わず臓器提供してほしいと思う。私の体の一部が、他の人の生きる希望になるのであれば、私は喜んで提供する。Ａちゃんの父親も言っているように「命は繋ぐもの」。臓器を移植することだけが命を繋ぐことだけではなく、私たちが生まれ、また子どもが生まれる。こういう事も命を繋ぐというと私は考える。

この話を読み終えて、命とは無限の可能性があると思った。生きている間は自分がしたい事をし、もし突然脳死になってしまったとしても知らない誰かが自分のおかげで助かるかもしれない。このたくさんの可能性がある尊い命を私は大切にしていこうと思った。そして、周りの人にも命の尊さを改めて感じてほしいと思った。

臓器提供には抵抗がある人がほとんどだと思う。だが、この命で助かる命があると考えると臓器提供もいいのではないかと思った。私は、臓器提供について深く考えた事がなかった。これを機会に臓器提供について家族で話し合い、自分の意思を伝えておきたいと思った。

より多くの人々がこの新聞記事を読んで、「命を繋ぐ」ということについて考えてほしい。そして、助かる命が一つでも増えてほしいと願う。

神奈川県ＰＴＡ協議会会長賞

いのちの授業をうけて

南足柄市立岡本中学校
一年　髙村　心結

私はいのちの授業をうけられて本当に良かったと思います。

事故、事件の被害者について、私は深く考えたことがありませんでした。テレビなども被害者、その家族について深くは放送しないし、「運が悪かったんだな。かわいそうだな。」と思うだけでした。

でも、今回のいのちの授業を受けて、考えが変わりました。

最初に思ったことは「ただ見ているだけの人も加害者なんじゃないのか。」ということです。たしかに暴力をしてる人が恐いのは分かります。でも助けられる命を助けないのは、たとえ自分が直接何かしていなくてもやってることは加害者の人とそう変わらないと思います。暴力が悪いと分かっていて、自分は助けられる立場なのに、恐いから何もできないっていうのは、本当に弱いなと思いました。

アニメを見ていたら、去年お世話になった担任の先生の言葉を思い出しました。「大変っていうのは、大きく変わる。大きく変われるから大変なんだよ」この言葉はなぜか心に残っていて消えません。あの男の子たちも、難しくても大変でも勇気を出していたら、良い方に大きく変われたんじゃないのかなと思います。

私は、どんな時でも、どんな立場の人でも出来ることはあると思います。なにもできないなんて無いと思います。だから、その時自分が出来ることを全力でやりたいです。出来ることを全力でやれば、後悔なんて、しないと思います。

今回の話を聞いて、いじめは絶対ダメだという意識が高まりましたし、被害者について、やられた側について考えるきっかけにもなりました。

いのちの授業を受けられて本当によかったです。

ともに生きる社会かながわ憲章賞

「思いやり社会」

川崎市立井田小学校
六年　吉田　美清

私の近所や学校では、さまざまな思いや願いでボランティア活動をしている人がいます。今、新型コロナウイルスが流行していてとても大変な時期なのに、なぜみんなのために働くのか。どんな思いや願いがあるのか知りたいと思いました。

そこで私は、近所で毎日ゴミ拾いをしている方に、どういう思いで暑い日も寒い日もがんばっているのか聞いてみました。私は、何か自分の利益になることがあってやっているのかな？と思っていましたが、

「毎日がんばっている子供や大人の人が、通学通勤するときに良い気持ちになってくれるためだよ。」

と言っていたのを聞いてとてもおどろきました。そして私は、人への思いやりは人々の心を明るくし、社会を明るくすることにもつながると思いました。

私も社会を明るくすることができると思い、さっそく実践してみることにしました。はじめは先生の手伝いと落ちている物は拾うことをやってみましたが、すぐに自分が遊びたいという気持ちや、めんどうだという気持ちを優先させてしまい、だんだんやらなくなってしまいました。この時も「人を笑顔にさせたい」という思いは変わっていませんでしたが、やはり自分の利益を求めずに思いやりをもって人を笑顔にすることは、簡単なことではありませんでした。なので、人のために働いているボランティアの方々は、思いやりの意識を強く持ち、それを実践していて、すごいと感じました。私達がとても感謝しなければならない存在なんだな、と思いました。私は、前回実践した時のようにすぐに思いやりの意識がうすれ、やめてしまうのはいやなので、衝動的にやるのではなく、目的意識をしっかり持って行動しようと思いました。また、人を思いやる心が大切だと思いました。そしてそのように考え、実践する人が増えれば、人間、その他の生き物がよりよく生きられる、明るく思いやりのある社会になるのではないか、そういう社会に私達の努力や心がけによりできるのではないかと思いました。

これからも、大変なのにがんばっているボランティアの方々に感謝していくことは、とても大切だし、必要なことなので、まずは身近なことからはじめ社会を明るくよりよくすることに努力していきたいです。

優秀賞

「いのち」は廻る

県立中央農業高等学校
二年　細野　めいか

出産。それは生き物にとって大きな出来事であり、生きぬかなければいけない場面だ。私は中央農業高校に入学して、初めてそれを身近に感じた。

私は、酪農家を目指している姉にあこがれ酪農部に入部した。そこでの活動は、毎日の搾乳や除糞などの他に、分娩が見られることがある。だが、牛も生きている、生まれる時間なんてコントロールできない。私は一度しか分娩に立ち会うことができていなかった。

しかし、ある朝いつも通り朝部活にいこうと部室に入ると、先輩たちがとても焦っている様子で着替えていた。何かあったのかと思い聞いてみると、

「牛が分娩した。早く牛舎に向かって。」

と言われ、牛舎へ急いだ。私はもしかしたら、分娩に立ち会えるかも、と期待しながら走った。先輩の後を追い放牧場で見たのは、子をやさしく舐める母牛と、地面に横たわりピクリともしない子牛の姿だった。

もちろん、私は初めての状況で何が起こっているのか、すぐに理解できなかった。そんな中でも先輩たちと駆けつけた先生は子牛をブルーシートで包み運んでいた。私はただ見ていることしかできなかった。いや、本当はちゃんと見ることすらできていなかった。

そして、朝部活は何事もなかったように、行なわれた。幸い、母牛は無事だったので、それほど大事にはならなかったのだろう。

だが私は分娩と聞き、期待や嬉しさだけを考えてしまい後悔した。母がどれだけ苦しい思いをして、大きなリスクを背負いながら産むのか。後に分かったが、家畜の世界では死産は、珍しくはないそうで私はとても悲観的になってしまった。でも、最後まで母牛は舐めて生きていることを、願っていたのかなと命の尊さと重さを感じた。

出産。それは、いのちが廻る初めの一歩で、あの時、生きられなかった子牛の為にも、酪農を通して、いのちに関わり続けたいと思う。

優秀賞

みいたんのこと

寒川町立旭小学校
二年　小林　柚香

二〇二〇年一月のさむいきせつに、みいたんは、じょさんいんでうまれました。みいたんがうまれたときわたしは七さいでみやびは四さいでした。おかあさんのおなかの中からうまれてきました。うまれるまえ、おかあさんの大きなおなかをさわるとポコポコとうごいていました。はじめて赤ちゃんを見たとき、すこし、うちゅう人みたいなかおだと思いました。そしてとてもうれしかったです。このときまだおかあさんは、おふとんによこになっていました。まだへそのおがつながっていたのでお父さんがとくべつなハサミで切りました。わたしは、へそのおと、ちがこわかったので、お父さんのせなかにかくれました。

みいたんのすきなところは、わらってくれるところと、あそんでくれるところ、あたまにつむじのうずが二こあるところです。いやなところは、ありません。

いのちのことは、よくわかりません。だけどみいたんのいのちは、みんなと同じでいのちは、一こしかもてないです。だからみんなのいのちを大切に思っています。あとじぶんのこともです。

優秀賞

「本当に伝えたいこと」

県立港北高等学校
二年　野田　栞名

カンタータ「土の歌」を初めて聴いた時、私は直感的に恐怖を感じた。その恐怖がどこからくるものなのか自分でもはっきりと分からなかったが、真っ先に浮かんだのは十年前の東日本大震災だった。いざ自然の猛威を目の当たりにした時、私たちには何ができるだろうか。命を救えるだろうか。無表情で当たり前の日常を次々と奪っていくその様、そこに私は恐怖を感じたのだと気づいた。命というものがどれだけ儚く、尊いものなのか普段生活をしていて改めて実感する機会がない。ニュースで事故や事件での死亡などをよく見るが、何回見てもやはりどこか遠い存在のような気がして学生の私には死の重みを理解しきれていないのだと思う。いつものように今日が終わり、明日がやってくる。その繰り返しという当たり前が崩れた瞬間、私たちはその命という存在に気づくはずだ。今の時代の日本には紛争も戦争もない。なので、もちろん突然親戚や友達を失うことなんて想像がつかない。「土の歌」の第四楽章「もぐらもち」にこんな一節がある。「笑ってやれよ人間を」この言葉には、命の尊さを忘れて戦争を続けていた人間に対する怒りや失望が込められていると感じた。当時の人々と今を生きる私達、命の尊さを忘れていることに関しては何も変わらないのではないか。終戦から七十四年経った今、ほとんどの人は戦争の恐ろしさを知らない。これは良いことなのかもしれないが、同時に悲惨な記憶も薄れていくということになる。私たちは命について深く考え直すことができるのに、あの時から離れれば離れるほど命の存在も遠くなっていき、人間から忘れ去られてしまうのではないか。そしてまた同じ過ちを繰り返すとしたら、最も恐怖を感じるのは自然災害や争いではなく人間ではないか。

だから私は人間という生き物としての「命」ではなく、人という感情や考えをもつ「いのち」について考える上でこの歌に込められたメッセージを忘れてはいけないと思う。それがいのちを守る、平和を守るための第一歩になるはずだ。

優秀賞

ふり向かずに前へ　池江璃花子19歳

伊勢原市立山王中学校
三年　細野　ひなの

ビデオを見て、私は当たり前の大事さを感じました。

今年の部活は夏の大会がなくなってしまい、チームの目標もさらっと消えて、今まで当たり前のように汗をかいて、たくさん喜んで、朝早く起きてたのが日常だったが、このコロナの影響でなくなり、今は何もない自分だと池江璃花子選手と同じように思っています。少し前も池江璃花子選手のビデオを授業で見たけど、その時はとても他人事の様な気持ちで見ていました。だけど今の自分がこのビデオを見ると、同感できる事が多かったです。

私は小学校3年生からバレーを始めています。土日も、夏休み、冬休み、春休み全てがバレーで他の小学生とは違う休みの過ごし方で正直いやで、友だちと遊びたいなと思う日々でした。だけどバレーをしていて運動神経が上がったり、礼儀の大切さも知ったり、友達から仲間になったり、そして中学のテスト期間では、バレーの動画を見て、バレーしたいなって思った事も何度もあります。バレーにはさまざまな気持ちがあります。その過ごし方を5、6年も続けてきて私はもう、この夏の大会でバレー人生を終わりにしようとしていました。だけど、今はコロナウイルスの世の中で自分のチームの大きな夢、「関東大会出場」がなくなってしまいました。練習もないし、運動もしていないし、自分らしさがなくなっているように感じています。「当たり前」が失われています。そんな気持ちの中このビデオを見たら、自分を変えなきゃと思いました。池江璃花子選手は病気の影響で、スポーツができなくて、筋トレさえできません。だけど私にはできます。本当に勝ちたい人は、この期間は頑張っています。

夏の大きな夢を失っても、今まで通りの当たり前が少しでもできるように、またこれから再スタートしたいです。後悔のないようにバレー人生を終えたいです。